

歴史を語る建物たち

庄内編
(第11回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

旧庄内藩校「致道館」(鶴岡市)



鶴岡市役所の向かいにある旧庄内藩校・致道館(以下、致道館)は、文化2(1805)年に開学し、同13(1816)年に現在地に移転した。以来200年、東北地方では現存する唯一の藩校建築として、その威容を誇っている。昭和26年には国の史跡に指定され、平成25年からは鶴岡市の指定管理者として、(公財)致道博物館が管理・運営を行っている。

風紀の乱れを正すために設立

江戸時代も18世紀後半を迎えると、天下泰平が長く続いたことで武士の風紀も次第に乱れてきた。庄内藩においても例外ではなく、華やかな服装、遊郭通い、賭博打ち、果ては「袖の下」で私腹を肥やす役人から、町人などとけんかする荒くれ者まで現れる始末であった。士風の退廃を憂えた9代藩主・酒井忠徳が、藩の重鎮であった白井矢太夫に意見を求めたところ、白井は「罪人を処罰するのは簡単だが根本的な解決にはならない。遠回りかもしれないが、武士の教育が必要だ」と

と答えた。かくて、文化2(1805)年、現在の日吉町の一角(明治安田生命付近)に藩校「致道館」が創設され、白井が祭酒(校長職)に任命された。その後、同13(1816)年には、10代藩主・忠器が「政教一致」の



藩校廃止以降も、致道館は鶴岡県庁舎および山形県支庁舎(明治8年～明治10年)や、鶴岡警察署(明治10年～17年、写真)など、主要な公共施設として使用された。
出典：ふるさとの思い出写真集「鶴岡」(国書刊行会)

目的から、当時城下にあった現在地に移転し、施設を拡充した。

なお、致道館の教育については、ホームページや、庄内文化財保存会(平成25年解散)の著書『史跡 庄内藩校 致道館』などに詳しいので、紙面の都合上、ここでは省略する。

未使用期間がほとんどなかった幸運

明治維新によって、明治6年、致道館は廃校となった。しかし、翌7年には、旧藩士の子弟を教育する「苗秀学校」となり、8年には現在の庄内地方が酒田県から鶴岡県に変更されたことから、致道館に県庁が置かれた。住民は地域の繁栄を期待して大いに喜び、県庁移転の仕事に、今でいうボランティアを申し出る者も多かった。県令(今の県知事)の三島通庸は、これを人心一体の機ととらえ、無礼講の一大祝典を挙行したという。

明治9年に鶴岡県は現在の山形県に統一され、致道館は一時期、山形県の支庁舎となったが、翌10年に支庁舎が廃止されると、今度は鶴岡警察署が置かれた。17年に警察署が建てられ移転した後は、尋常小学校など初等教育機関が設けられた。昭和34年に、朝陽第一小学校が移転してからも、致道館は鶴岡市の中央公民館や教育委員会に用いられ、昭和40年から44年の大改修を経て、昭和47年から一般公開されるに至った。

この間、致道館を構成する建物(書庫、自習室など)はどんどん取り壊されていったが、講堂や聖廟など“心臓部”ともいえる建物は残され、昭和26年には加藤精三・鶴岡市長(衆院議員・加藤鮎子氏の祖父)の尽力もあり、国の史跡に指定された。

致道館の統括文化財保護指導員を務める富樫恒文さんは、「建物は使わないと痛む。藩校としての役目を終えてからも、何らかの用途で建物が使われ続けてきたことが、今日の現存に至っている」と話す。

入場無料は条例で定められている

致道館が昭和47年に一般公開された当初は、管理を外部委託していたこともあり、入場は有料であった。しかし、昭和58年から62年までの、2回目の大改修を経た後は、市の直営管理で入場無料に改められ、今日に至っている。これは実は、市の条例にも定められている。平成25年からは、指定管理者として(公財)致道博物館が管理・運営を行っているが、入場無料の条文は堅持されている。全国的に、指定管理者制度の導入で有料化に踏み切る施設が珍しくない中(厳密には、両者はセットではない)、入場無料を貫く理由は何だろうか。

富樫さんは「分からない」と言うが、「有料だったころは、あまり入場者が多くなかったと聞いている。少しでも多くの人に致道館を訪れてもらうために、入場無料を続けているのではないかと推測する。

ところで、(公財)致道博物館では、約500章からなる論語から、小中学生向けに55編を選定した『庄内論

語』を発行している。富樫さんも選定委員の一人だ。毎年、市内の小中学校を中心に、多くの児童・生徒が学校行事で致道館を訪れて、『庄内論語』を音読するという。最近では、隣県などから修学旅行で致道館を訪れるケースもあるそうだ。

富樫さんは、「畳に正座して大声で論語を読むのは、まるで200年前にタイムスリップしたよう。そうした地域の歴史や文化を肌で感じてほしい」と、その効果を強調する。中には、55編をすべて暗記している子どもも少なくないという。「意味は分からなくてもいい。将来大人になって、困った時などに、『あの時、大声で論語を読んだ』という経験を思い出してもらえれば」と話す富樫さんの顔には、温和な表情が浮かんでいた。

ハードとソフトの両面から保存が必要

致道館で論語を音読するのは子どもだけではない。入場無料の効果もあってか、行政職員や地元企業の社員、経営者など“大人”の団体もたびたび訪れるという。富樫さんは、「論語を音読することで、心と体のバランスを整えられる」と話す。誤解を恐れず言えば、ストレス社会の現代だからこそ、こうした需要が高まっているのではないだろうか。

そうしたことから富樫さんは、「致道館は、建物が貴重というハード面での保存も重要だが、致道館を拠点に“学びの心”を伝えるというソフト面においても、この建物を後世に残していく必要がある」と力説する。

ちなみに、指定管理者として致道館を管理・運営している、(公財)致道博物館の館長(代表理事)は、旧庄内藩主酒井家18代当主の忠久氏である。ある意味、藩校としての致道館が廃校となってから140年後に、致道館は旧藩主の子孫のもとに戻ったといえる。これも何か、不思議な縁なのだろうか。

城下町・鶴岡の宝であり、鶴岡の教育の原点(富樫さん)でもある致道館は、今日も静かに、地域に生きる人々を見守っている。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)



藩主がお成りの際に過ごされた部屋の床下。木枠で覆われ、内部は砂が詰められている。賊の侵入を防ぐための仕掛けとして作られた(筆者撮影)。